

講演及び対談「21世紀を生きる子どもたちの可能性を最大限に伸ばすためには」 記録

本プログラムでは、はじめに中央教育審議会教育課程企画特別部会主査代理の天笠 茂氏より、「育成を目指す資質・能力」や次期学習指導要領改訂等につつまわる、教育全体の動向と今後の方向性についてご講演いただいた。続いて、天笠 茂氏と国立特別支援教育総合研究所理事長の穴戸和成が、講演の内容を踏まえ、「学習指導要領改訂の特徴」「アクティブ・ラーニング」「カリキュラム・マネジメント」の3点について対談を行った。講演と対談の中では、教育現場で期待される取組やそれらを特別支援教育においてどのように反映させていくかについても提案がなされた。

<講演>

講演者 天笠 茂 氏 (千葉大学特任教授, 中央教育審議会教育課程企画特別部会主査代理)
司 会 明官 茂 (国立特別支援教育総合研究所)

学習指導要領の改訂において、「Ⅰ. 求められる教育課程に関する考え方の理解」「Ⅱ. 学習指導要領改訂の方向」「Ⅲ. 学校段階間の接続, 社会との接続」という3つの柱で講演された。

今回改訂となった学習指導要領等は、特別支援学校や特別支援学級の教員だけでなく、すべての教員に特別支援教育について知識を高めてもらうことを目的としており、総則には、通級による指導や特別支援学級における教育課程編成の基本的な考え方、さらに、各教科においては学習上の困難さに対応した、指導の工夫や手立てが示されたことが紹介された。また、初等中等教育全体の改善・充実は特別支援学校においても重視されるとの説明があった。

特別支援学校や特別支援学級等の教員に関心を持ってもらい、理解を深めることが期待される事柄に「学習指導要領改訂の方向性」がある。「社会に開かれた教育課程」という理念の下、学校は子ども一人一人の資質能力に応じて必要な力をつけて社会に送り出すこと。社会資源を活用し、子どもの視野を広げたり深めたりすることが大切であり、そのためにも、学校は社会と共に連携しながら活動することが大切であることと述べられた。

授業改善の視点としては、「主体的な学び」ができているか、「対話的な学び」が実現できているか、「深い学び」が実現できているかを押さえることが必要であり、深い学びをすることで概念化や創造力、思考力、判断力の育成にもつながるため、教員はこれらの力を伸ばすために手立ての工夫を考えることが大切だと指摘された。

カリキュラム・マネジメントについては、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点、教育課程の編成・実施・評価という一連のPDCAサイクルの確立、人的・物的資源等を効

果的に組み合わせることが大切であるという指摘がなされた。また、PDCA サイクルは、カリキュラム評価と学校評価をつなげるものであり、無駄のない連携の在り方の一つにもなる。学校段階間の接続，社会との接続を考えることは，子どもが社会に出た後の充実につながるため，重要な視点であることが述べられた。

(以上，要項 P8 参照)

<対談>

対談者 天笠 茂 氏 (千葉大学特任教授，中央教育審議会教育課程企画特別部会主査代理)

対談者 宍戸和成 (国立特別支援教育総合研究所 理事長)

司 会 明官 茂 (国立特別支援教育総合研究所)

<学習指導要領の改訂の特徴について>

明官：学習指導要領の改訂により，授業はどのように変わると思うか。

天笠：学校の授業は変わるのではなく，変えていくと考えるのがよい。知識を伝えることも大切であるが，そこにとどまるのではなく，活用の過程に工夫を加えることも必要である。

明官：障害のある子どもにとって学習指導要領の改訂をどう考えるか。

宍戸：子どもに合わせて指導の工夫をつきつめることは特別支援教育の充実につながることである。障害が重いか軽いかではなく，目の前の子どもへの指導に対して，あれこれ教師が考えることが必要である。

<アクティブ・ラーニングについて>

明官：深い学びということをどのように取り上げたらよいか，もう少し詳しく知りたい。

天笠：教師が伝えることは大切だが，子どもが活動をする中で一定の法則や決まりを見つけていくプロセスが重要である。具体から抽象に引き上げることが授業には必要である。

明官：重い障害のある子どもへのアクティブ・ラーニングをどのようにとらえたらよいか。

宍戸：学んだことが生活の中に汎化することが大切であり，それが深い学びにつながっていると考えることも必要である。

<カリキュラムマネジメントについて>

明官：カリキュラム・マネジメントの中でどのような工夫をするとよいか。

天笠：アクティブ・ラーニングを授業改善とし，学校マネジメントの両輪で考えることがよい。教師一人一人が学級経営を学校経営と照らし合わせて考えられているか等，できることから取り組むことが必要である。

明官：特別支援学校のカリキュラム・マネジメントについてどのように考えるか。

宍戸：特別支援学校でも同じように学校の活性化を考える必要がある。また，幼稚部から

高等部まである学校もあり，別々ではなく，学校全体として考えるためのきっかけとしてカリキュラム・マネジメントをとらえたい。